

古語辞典を引く 御手洗靖大

平安時代の和歌を研究し、週の五日を古典の教師として働く私は、普通の人よりも少しだけ古語辞典を引く機会が多いだろうと思う。いつだったか、「未来」の歌人である野口あや子に、おすすめの古語辞典を聞かれたことがある。歌をものする人々は、普通の人以上にも、もしかしたら、気になる話題かもしれない。そんなことを思っただけ古語辞典のことを書いてみようと思う。

辞典には、何巻にもわたる大型のものから、高校で買わされたような卓上のものまである。図書館にあるような大型ものに、例えば、『角川古語大辞典』や、現代語がメインであるが日本最大の国語辞典である『日本国語大辞典』などがあげられる。私は小売館の『古語大辞典』が好きで買ってしまった。

卓上の古語辞典は持っている人も少なくないだろう。高校で買わされたものを使っているという人もいられるかもしれない。

実は数年前から、学習指導要領の改訂を見据えてか、各社の古語辞典が改訂を行い、内容面、ビジュアル面ともに進歩している。私の手元には、気に入って購入した卓上の古語辞典が四冊ある。

『三省堂全訳読解古語辞典』、『旺文社全訳古語辞典』、『ベネッセ古語辞典』、『岩波古語辞典』である。ちよつと紹介しよう。

例えば入学したての高校生など、古典や文語の初学者に最良と思われるのが、『三省堂』である。これは非常に読みやすく、オー

ソドックスな記述で語彙の広がり力をいれたコラムも面白い。もう少し、レベルをあげて、進学校の古典を頑張りたい生徒に、『旺文社』を勧める。特に文法に関する項目は、気付けられることが多い。例えば、もし歌会に若山牧水がやって来て、

・明日のことは明日ぞさだめむとにかくに寝むとおもへつかれしものを『白梅集』所収。本文は『若山牧水全集』短歌新聞社

こんな歌を出したらどうするだろうか。「作者は今、疲れている。『つかれし』の『し』は過去の助動詞なのだから、ここで使うのは間違いでは？」と指摘したくなる人は、『旺文社全訳古語辞典』の過去の助動詞「き」の項目を読むと良い。(平安時代の語法を規範とする学校の古典文法では殆ど教えないが、)中世以降の語法として「完了・存続(〜ている)」の用法があると書かれている。実は、文語文の文法と学校の古典文法は基本的に重なるが、まれに異なる事がある。知っていることも辞書を引くと発見があるのだ。

『旺文社』とともに、ある程度古典文法が身につけている文語生用にもあるが、こちらは大人用。先程の過去の助動詞「き」を見ると、そもそも「き」で表されるのはどの時点のことなのかとか、「けり」との違いが詳しく説明されている。さらに、この辞典には附録に小冊子の名歌名鑑賞辞典も付いている。

逆にクロウト向けの辞書もある。それが『岩波古語辞典』だ。これは、用言を連用形にして載せてある。最も使われやすい形が連用形だからだという。普通の辞書と単語の形が異なる不便な辞書だ。ただし、編者の一人、国語学の泰斗大野晋渾身の序と助動詞解説にしびれる逸品でもある。これも私が好きな辞書の一つだ。